

合法的に描く、いまどきのグラフィティ事情。

70年代、NYで始まったグラフィティ。90年代後半から、ベルリンに世界中からアーティストが集まり、盛り上がった。街で見かけるほとんどのビルにスプレーで何か描かれている。消費費用も馬鹿にならない、と問題になっていたが、最近では、ビルの持ち主が依頼するグラフィティが増えている。70人もの警官で組まれた、グラフィティ取り締まり専門のチームが存在するベルリン。「不法でやるなら、5分ではと描くしかない。それでは自分の表現が難しい」とレイク。彼は合法的に描く、ストリート・アーティストの1人だ。店舗や住居の壁、トラックなど、1㎡当たり50ユーロ。モチーフは依頼人と話し合ってから決定。時間は1200㎡の作品で10日間かかる。「名前が知られているアーティストの作品なら、ほかの奴らからリスベクトを受け、上から落書きされることはない」とレイク。アーティストはもちろん、落書きに悩む住民も、どちらも満足する結果となっている。



1200㎡の壁一面に約100個の絵の具を使って描いた2004年の作品。

Berlin

クロイツベルク地区の団地の壁、3000㎡に描いた作品。98年の作だが、いまだ上からの落書きなし。www.lake-one.de



ミリ単位の線から平面塗装まで、多数のヘッドを常備。

13歳から活動しているという「レイク」は、クロスティアンヴァール。



疾走するベルリン



トラバントを使った人気ガイドツアー「トビサファリ」。

製造50周年を迎えた、旧東独の国産車「トラバント」

旧東独の国産車「トラバント」、別名。走る段ボール。紙をプラスチックで固めて作ったこのクルマが今年、製造から50周年を迎える。総重量600kg、最高時速100kmの「P50」シリーズで、1957年11月、トラバントはデビューした。いまは製造をストップしているが、これが逆にマニア心をくすぐる結果に。愛着を覚える東独出身者だけでなく、西の人にもファンを増やし続けている。製造会社サクセンリングがあったツウィツカウ市では、94年から毎年、国際的な集会も行われる。50周年記念の今年には、1800台のトラバントが大集合。ベルリンやドレスデンには観光客のために、トラバントに乗るツアー「トラビ・サファリ」も。壊れているのか? と不安になってしまうエンジン音と排気ガスを出すこのクルマ、一度は試乗してみる価値ありだ。



旧東ベルリン地区では、トラバントが駐車されていくクルマが多い。



右: 国際トラバント集会。50周年記念には、4000人のファンが集まりロゴを作った。左: ベルリンの壁の前を走るトラバントツアー。

寸分違わぬベルリンが、「セカンドライフ」内に登場!

仮想空間「セカンドライフ」。この中に、4月、正確に再現されたベルリン「ニュー・ベルリン」が登場した。航空写真と、建築見取り図を対比させながら作る街は、非常にリアル。現在は、アレクサンダー広場周辺が完成している。「面白いのは、現実の「ファーストライフ」とリンクしていることだ。たとえば、ニューベルリン内に再現されたTV会社では、その日の現実のニュース映像が流れる。逆に、ニューベルリン内のニュースが、現実のTVで放映されたことも。8月19日には試験的なプロジェクトとして、AOホテルから、500人分のベッドが提供される。ニューベルリン内でベッドを見つけると、現実のホテルのサイトにリンクし、アパートの名前で予約できる仕組み。日本からも一瞬で行けるベルリン。足を運んでみてはいかが?



意外にローテクな手作りの機械はスカイプ用のマイクとアンテナ。



創立者のトビアス・ナイセケとヤン・ノーマス・バソコン。



オフィスは、窓のない暗い小部屋に、ミラーボールが輝く怪しい場所。

左: ニュー・ベルリン。テレビ塔横の路面電車の駅をクリックすると、現実のベルリン交通のサイトに飛ぶ。www.berlininside



*Penは月2回刊、1日と15日発売。

河内秀子・文 text by Hidako Kawachi